

欧州内ほころび懸念

歴史的な背景や過去の政治体制の違いから、ロシアとの関係は欧州各国間の差が最も大きい外交テーマだった。ロシアによるウクライナ侵略は、欧州がその差を超えて結束する出来事となった。欧州連合（EU）は現在、昨年2月の侵略開始当時と比べてもより固く、ウクライナを支えることで結束している。

現段階で、プーチン露大統領にはウクライナとの外交交渉に臨む用意はなく、一方的な主張しか展開していない。プーチン氏を交渉の席に着かせるには、ウクライナが戦闘で優位に立ち、プーチン氏が



マリー・デュムラン 氏

欧州外交評議会
広域欧州プログラム長

劣勢を認識して計算を変えるようにするしかない。そのために、欧州はウクライナを軍事面で支援し続けることが必要で、結末の維持は不可欠だ。だが、今後戦争が長期化すると、結末にほころびが生まれる恐れがある。戦争に伴う経済的な悪影響の度合いや、難民の受け入れといった社会的コストの大きさは国によって異なり、負担の大きい国で「なぜ我々が『欧州の結末』のためにより多くの代償を払わなくてはならないのか」との不満が生まれる可能性がある。

もう一つの懸念材料は、エ

スカレーションに対する認識の差だ。核使用に至るエスカレーションを非常に恐れるドイツのような国もあれば、フランスのように「現時点ではパニックになる必要はない」と構える国もある。この違いはまだ顕著には表れていないが、ウクライナへの軍事支援をいつまで続けるかという点で、EU内の不一致を招きかねない。

戦争が長期化する中で必要な軍事支援を続けるには、兵器の生産・供給態勢を拡充することも求められる。現在、欧州各国は手持ちの兵器をウクライナへの支援に充てているが、自国の安全保障を損ねない状態にしなければならぬ。（聞き手・パリ支局 梁田真樹子）